

辻川界限

柳田國男・松岡家顕彰会会報 第1号



柳田國男先生の少年の頃の遊び場所であった鈴の森神社（辻川）

発刊のこぼれ

（財）柳田國男・松岡家顕彰会

理事長 嶋田正義

「村は住む人のほんの僅かな気持から、美しくもまぶくもなるものだといふことを、考へるやうな機会が私には多かつた。」

これは柳田國男の「美しき村」にある文章です。私はよくこの言葉をくりかえします。

他所に行つて、福崎町を紹介する方法はいろいろありますが、私の経験では「柳田國男兄弟の生誕の地で、生家が保存され、兄弟の記念館のある町です」と話すのがいちばん多いようです。柳田國男はよく知られ、この人の思想は多くの人々に影響を与え、今も研究が進められています。

よくぞ、ご兄弟が福崎の辻川に生れてくださった。よくぞ、「故郷七十年」を残してくださったとしみじみ思い、感謝しています。

財団法人柳田國男・松岡家顕彰会は昭和四十七年に設立され、記念館は昭和五十年に開館しました。記念館は福崎町のシンボルとして存在し、町内はもとより、全国各地から入館者が訪れています。

一つの組織が存続し、発展するためには、最低三つの条件を整えなければならぬといわれています。一つは規約、二つは予算、三つは会報を持つことです。規約と予算は設立と同時に作られていますが、会報の発行はまだ実現していません。私は理事長に就任した時から会報を発行し、顕彰会及び記念館の活動を広く知ってもらわなければと考えてきました。

このたび、ようやく念願がかない、第一号をお届けすることができました。ご一読くださり、一層のご支援とご協力をたまわりますようお願いいたします。

柳田國男先生の

『故郷七十年』

理事 鎌谷 嘉道

柳田國男先生には、存命中に刊行された単行本が九十冊あります。

「遠野物語」や「海南小記」「明治大正史世相篇」「桃太郎の誕生」「国語の将来」「先祖の話」などの主要著作の他に、「村と学童」「なぞとことわざ」など、子どもに向けて書かれた本もあります。そのほかに、野の草や鳥のことを書かれた可愛らしい「野草雑記」「野鳥雑記」のような書物まであります。

柳田國男先生の文章は、先生に固有な、一種独特な屈折したものの言い方がある、取り付きにくいのですが、読めば読み込むほどに滋味が出てくる不思議な魅力を持っています。

百科全書的とも言える先生の多様な著作のなかで、何から読み始めたらよいかと問われた場合、わたくしはためらうことなく「故郷七十年」をあげることにしています。

「故郷七十年」は、神戸新聞が創

集し刊行されました。

この項目を見てもわかるように、口述された回想記は、辻川や北条や布川で過された少年の頃から、貴族院書記官長や朝日新聞論説委員を経て、野の学者として民俗学を創始された多彩な生涯の全域にわたっており、自ら「単なる郷愁や回顧の物語に終わるものではないことをお約束しておきたい」といわれたとおり、庶民の生活の事実にもとづいて考える先生の学問のこの上なく親切なわかりやすい入門書になっています。

柳田先生が北条から利根川沿いの茨城県布川の長兄のもとへ行かれたのは、十三歳の時ですが、その時はじめて海の方から吹いてくるイナサ（東南の風）を受けて利根川をさかのぼって行くたくさんの白帆の舟を目にされました。その時の新鮮な驚きが、大学生の時、身体を悪くして静養しておられた渥美半島の伊良湖岬の朝の浜で、暴風のとなどに潮流によって南方から運ばれてきて打ち上げられている椰子の実を見た時の驚きと重なって、晩年、日本人は潮流と風によって、米を携えて島伝いに南方から移ってきたのではないかという「海上の道」の日本人起源説に発展していくことになります。



「故郷七十年」

辻川での少年のころのことです。冬の日、北野の今もある灌漑用のため池で二、三人の友だちと氷滑りをして遊んでおられました。子どものことで、池の中の方は氷が薄くなっていることに気付かれていなかったのです。

その時、長兄の許に嫁いできて不縁になって北野の実家に帰っておられた兄嫁がそれを見て、家から飛び出してきて、國男少年を横抱きにして家に連れて帰られたという、忘れられないことのできない姉弟の情愛の思い出なども語られています。

「故郷七十年」というのは、故郷を出てから七十年という意味で、聞き書きが行われたのは、柳田國男先生が八十三歳の時のことです。

展示物から

松岡房夫

記念館には、柳田國男先生をはじめ松岡家一家の貴重な資料・作品などが数多く展示されています。

主な資料や作品、映丘先生の絵画などは二階にあつめられています。一階にも随分貴重な品々が展示されていて、最初に目につくのは、右側のご両親の肖像画と祖母小鶴氏の「小鶴女史遺稿」と言う和綴じの本と直筆の詩です。次に、その奥に父君約齋翁のわずか九歳の時に書かれた「唐詩選」の幾つかの詩とそれに添えられた彩色された絵があります。



▲唐詩選



小鶴女史遺稿 ▶

次に、正面のガラスケース内に、長兄鼎氏の東大での医学修行時代に細かくぎつしりと書かれた多くのノート類がずらりと並べて展示されています。これらの資料は、眺めているうちに松岡家一家のそれぞれのつながりについて色々なことが考えられそうです。

祖母の小鶴と言う方は、遺された「小鶴女史遺稿」でも判るように、幕末当時の女性としては誠に珍しい学識のある方で、展示されている漢詩などの正確な書きかたとした文字の書き方などからも、随分几帳面な性格だったようです。その子の約齋翁九歳の作品「唐詩選」の筆写では、何より驚くのは一つ一つの詩に添えられた彩色された絵です。中国の唐の時代の服装やその背景に至るまで実に見事に描かれていて、とても九歳の子どもの作品とは思われません。各所に残された成人されて後の父約齋翁の書幅は、いずれも丁寧な書きかたとした書体で書かれ、その誠実な人柄を偲ばせます。

これらを五兄弟はどのように受け継がれたのでしょうか。

まず一つは、鼎先生の数多くのノートの正確な書き方は、祖母小鶴女史や父約齋翁の性向をそのまま受け

継がれているのではないかとこのとです。もう一つは、絵画の才の方は末弟の映丘先生が一番よく受け継がれたのではないかとこのことで、反対に國男先生はあまり受け継がれておられなかったようです。それは、先生自身、学校の絵画の授業で巧く描けなくて泣いてしまった、と言われてはいますし、ずっと後の話の中で「絵の上手な映丘に、辻川の生家を描かせようとしてあれこれ説明して描かせたが、似ても似つかぬものになってしまった」と言う國男先生の述懐（故郷七十年）があることでも判ります。人に説明して描かせるくらいなら、多少下手でも実物を知っている自分が描いて見れば、それほど「似ても似つかぬ」絵にならずに済むはずだからです。

父の約齋翁は世渡り下手の学者だったようですが、反対に、長兄の鼎先生をはじめ通泰先生、國男先生、映丘先生はそれぞれの世界で大いにリーダーシップを発揮されていますので、むしろこれは近所のもめごとの仲裁役にも長けたと伝えられている母親のたけ氏の性格をそれぞれに受け継がれたのではないのでしょうか。ただ静雄先生は海軍兵学校を首席で卒業、日露戦争でも殊勲をたたら



▲松岡家・長男鼎氏の東大医学講義の毛筆手書き帳

れ、前途洋々の身でありながら途中退役、好きな学問に打ち込まれたのは、あるいは、兄弟の中では一番強く父約齋翁の性向を受け継がれていたのかも知れません。書は兄弟中で、随一だったと言い伝えられています。記念館には無い「小鶴女史遺稿」の原稿の筆記本は布佐の松岡家に、そして、國男先生少年時に筆記の「竹馬余事」の方は、東京の柳田家にあつて記念館に無いのが残念です。

館だより

伊勢の大神楽

お米の収穫が終れば、伊勢の大神楽（獅子舞）の笛や太鼓の音が聞えます。私達の子供の頃は、村で神楽の笛と太鼓の音が聞えると我れ先に宿題も何もかもほったらかして飛び出し、獅子舞に一軒一軒ついて廻っておりました。獅子舞の内の大道芸は子供に夢を与え、大人になってもその想い出は忘れることが出来ません。天照皇大神のご神徳をえて、神楽舞で、火神を鎮め、四方のお祓いをし、家々の繁栄村々の繁栄をお祈りします。

本年も神楽（獅子舞）は柳田國男・松岡家顕彰会記念館が主催し、当日第一に辻川区氏神、鈴の森神社で奉納の舞、次に柳田國男と兄弟の生家を祈り清祓いをし、記念館前庭で獅子舞を納めてもらいますので多数参観に来て下さるよう御案内致します。

日 時 平成十六年十一月十三日(土)
午後一時三十分から

場 所 柳田國男・松岡家顕彰会記念館前庭
入場料 無料

※雨天の場合は翌日の日曜日



▲伊勢の大神楽

岩田健三郎版画教室

十一月に入ると郵便局より、年賀ハガキが売出されます。それに合せ版画家、岩田健三郎先生の指導で、年賀状の教室を開きます。友人お誘い合せ参加下さい。

日 時 平成十六年十二月四日(土)
午後一時三十分から

場 所 柳田國男・松岡家顕彰会記念館
費用 材料代 一枚 百円
持参品 筆記用具 彫刻刀持っておられる方は持参して下さい。

申込先 柳田國男・松岡家顕彰会記念館
※小学生の低学年の方は保護者と共に参加して下さい。

佐次清千之百歳展

十二月には福田在住の佐次清千之氏が、本年九月で百歳になられた現在も健康で、俳画を書いておられますので、俳画展を開催する予定です。

事業報告

わら葺き民家と 布人形展

布人形展

赤穂市有年在住の島津義弘さんと、奥様の美穂子さんの二人展を二ヶ月間展示していただきました。昔はそれぞれ地域によって、民家も材料や地形によって、間取りの大きさが違っておりましたが、現在は、全国が〇〇ハウスの形で同一化しております。島津さんの手で岩手の民家曲り家、岐阜県の合掌造り、京都府美山町のカヤ葺民家、岐阜県清見村の板葺民家、茶室、山陽路の民家等珍しい民家を二十五軒出展、それに合せて奥様の布人形で民家の庭先で遊ぶ子供達を再現して展示され、来館者に民家と人形が農家の庭前で遊ぶ子供の風景に目を細め昔を語る楽しい一時を過してもらいました。



▲わら葺き民家と布人形

編集後記

初回の会報を出すことになりました。柳田國男・松岡家顕彰会理事の方々に原稿を書いてもらいました。柳田國男とその兄弟の偉大さを少しづつ知っていただき、皆様様のお力で守っていただければと思います。

この度、台風十六号・十八号・二十一号・二十三号と連続し、小修理もしなければなりませんので、農協の振込用紙を同封致しておりますので、浄財のお願いを致します。

※表紙題字（辻川界隈）は版画家・岩田健三郎先生の直筆です。

柳田國男・松岡家顕彰会記念館
〒六七九-二〇〇四
兵庫県神崎郡福崎町西田原一〇三八-一二

TEL 〇七九-〇二一-〇〇〇〇
休館日 毎週月曜日と祝日の翌日
入館料 一般 二百円 小人 百円
開館時間 午前9時30分～午後4時30分